

# 音楽・人・メディア — 変わりゆく音楽の価値 —

2013年度国立音楽大学音楽研究専修 研究発表会 専門ゼミⅠ・Ⅱ

音楽の価値ってなんだろう—そこから、私たちの研究は始まりました。

音楽の価値なんて、人それぞれ。そう思われる方が多いかもしれせん。

しかし、私たちはあえてそれを考えてみることにしました。十人十色、みんなちがってみんないい—それぞれの見方や考えからみえてくることがあるというわけです。今回、私たちが、音楽の価値を考えるにあたって、焦点を当てたのは、メディア(ここでは、主に新聞、雑誌、テレビ等の媒体をいう)。メディアの変遷を見ながら、そこに見えてくる人と音楽との関わり、音楽の社会における在り方を探ってきました。

皆さんも一緒に、音楽の価値を考えてみませんか？

現代社会において、メディアは必要不可欠な存在です。

では、現代のようなメディアがなかった時代には、人々はどのように音楽と関わりをもっていたのでしょうか。まずはここから、音楽の価値を考えていきます。

出発点としたのは、18世紀の

ヨーロッパ。啓蒙主義の18世紀において、上流階級と下層階級とは音楽との接し方がまるで異なっていました。音楽は、上流階級の宮廷や貴族が楽しむものであつて「支配の道具」としての意味合いも強くもつていました。下層階級の人々は、多くが音楽に触れていただけではありませんでした。しかし、18世紀中頃に起こった中産階級の台頭や演奏会の発達によって人々と音楽の関わりは変化していきます。

## 紙媒体の登場

18世紀に登場するのが、楽譜雑誌を始めとする紙媒体です。楽譜の印刷は18世紀前後から盛んに行われるようになり、楽譜の大量頒布が可能になりました。そして、中産階級を含む一般市民もその楽譜を手にとるようになりました。音楽雑誌や新聞も18世紀前後に登場し、18世紀半ばから19世紀にかけて飛躍的にその種類や発行部数は増えていきました。当時の雑誌や新聞には音楽批評、楽譜批評が掲載されていました。作曲家やその作品、各地で行われた演奏会について書かれた音楽批評、演奏を聴く前に楽譜のみを見て書かれた楽譜批評。これらの紙媒体を手

することで、人々の音楽観はどのように変わっていったのでしょうか。また、音楽作品にどのような影響を与えていたのでしょうか。当時の人々にとつての音楽の価値や当時の社会での音楽の在り方を考察します。

## 日本の紙媒体と音楽

ここで、少し日本に目を向けてみましょう。日本に音楽雑誌が登場したのは明治になってからのこと。明治23(1890)年に創刊された『音楽雑誌』がその始まりでした。それ以後様々な音楽雑誌が発刊されて現在に至ります。当時の日本の音楽界についての論評や演奏会の報告、その時代特有の童謡や唱歌について取り上げられたものもありました。また、日本での紙媒体の例として、戦時下の音楽と紙媒体(新聞など)の関係性について考えました。第二次世界大戦真っただ中の1930年代から1940年代は、新聞の公募や委嘱によつて国家目的に依じて音楽がつくられていました。このような特殊な状況の中で、人々はどのように音楽を受けとめていたのでしょうか。紙媒体をめぐる日本人々の音楽の考え方の変化を探ります。

現代に目を向ける  
様々なメディアの登場

さて、1900年代になると、現代の私たちにまで通じるようなメディアが登場してきます。レコード、ラジオ、テレビ、デジタルオーディオプレーヤー、そしてインターネット…。これらのメディアを通じて考えるのは、今を生きる私たち自身がどのように音楽について考えているのか、そして音楽の社会的価値はどうなってきたのかということなのです。

例えば、CD。いつでもどこでもが可能になったのはこのCDというメディアが誕生してからでしょう。音質を重視するクラシックですが、このCDの登場により私たちのクラシック音楽の聴き方、また音楽への価値観はどのように変化したのでしょうか。CDの登場により変わってきたのは、ポピュラー音楽の分野も例外ではありません。この分野でも、CDを無料配布するという新たな試みがなされています。CDの売り上げ低迷が叫ばれている中、なぜそのようなことをするのでしょうか。もはや、CDの売り上げ低迷は音楽の価値を左右していかないのかもしれませんが。音楽の価値はどこに

見出されていくのかを考えます。

ところで、最近テレビの音楽番組をみる機会がありますか？見る機会ではなくて、番組自体が減ったのではと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、実は逆に増えているのです。

なぜ、音楽番組を目にする機会は減ってしまったのでしょうか。音楽番組が私たちにもたらしている影響を考えます。また、視覚を伴うことで音楽の在り方が変わってきてしまったのがBGMです。テレビで流れる外国の映像に伴って扱われるBGMに違和感を覚えたことはありませんか。映像とそれに伴う音楽(BGM)との関係性をみることで、私たちの音楽に対する意識を探ります。

インターネットやデジタルオーディオプレーヤーが登場し、音楽配信が行われるようになったことで、私たちが音楽との関わりは増々促進されていきました。私たちは、CDを買わずとも音楽を聴くことができ、より多様に音楽を楽しめるようになりました。その一つにインターネットでの音楽を通じたオンラインコミュニティがありま

たり、共通の音楽の趣味をもつ人を見つけてことができるようになった。デジタルオーディオプレーヤーも、新しいものが次々と登場し、音質に重視してつくられるようになっていきます。この2つのメディアの出現による私たちの音楽の価値の変容をみていきます。

ここまで、私たちにとって身近なメディアを取り上げてきましたが、これらのメディア以前に誕生したレコードや、ラジオに触れる機会がありますか。現在、これらのメディアが見直されています。レコードは、持ち運べもしないのに生産量が増加しています。ラジオは、スマートフォンやパソコンを使用して聴くものが登場しています。より便利なのがある現在、なぜ、これらのメディアはなくなるのではないのでしょうか。この2つのメディアが私たちにどのような音楽との触れ合いをもたらすかを考えます。

多様な見方があるメディアと音楽、そしてそれを享受する私たちとの関係。研究発表会では、私たちの考える音楽の社会的価値を示してみたいと思います。これらの「？」への答えを知りたくありませんか。「研究発表会？難しそう」と身構えずに、ぜひお越し下さい。

参考資料

- ◆大崎滋生『音楽演奏の社会史…よみがえる過去の音楽』東京書籍 1993 (請求番号・O57870他)
- ◆ダールハウス他 奥田恵二他訳『ロマン派の音楽、クラシック音楽史大系 5』パンコンサーツ 1985 (請求記号・O6749)
- ◆戸ノ下達也 長木誠司編『総力戦と音楽文化…音と声の戦争』青弓社 2008 (請求記号・J114364)
- ◆小原由夫『アナログレコード再聴戦』径書房 1996 (請求記号・O60-571)
- ◆鳥賀陽弘道『ポップとは何か…巨大化する音楽産業』若波書店 2005 (請求記号・J104934)

